

「キリストの日に備えて」

詩篇
ピリピ人への手紙

第51篇7節～12節
第1章1節～11節

説教 岡村 恒牧師

「わたしはこう祈る」。キリストの使徒パウロがピリピという町にある教会の人々のための祈りを記しています。

ピリピは、今のトルコからヨーロッパに渡ったところにある商業都市でした。このピリピで、パウロの言葉を信じる者が起こり、教会が生まれました。パウロは熱心にイエス・キリストについて、聖書が明らかにするまことの神について語りましたが、たちまち迫害が起こり、パウロはピリピを後にすることになりました。しかしこの時、ピリピでパウロが味わった歓迎と深い愛情は、その後も途切れることはありませんでした。この手紙を読むと、ピリピ教会の人々とパウロがどれほど深くお互いを思い合い、支え合っていたかよくわかります。この手紙の特徴的な言葉の一つは『喜び』です。実際には迫害があり、イエス・キリストを信じて生きるのが困難な時代でした。しかし、その苦しみの中にある愛する兄弟姉妹に、パウロは「主にあって喜びなさい」と繰り返し語ります。

牢獄の中にいたパウロが、『喜びが溢れてくる』と言うのです。何故か、理由ははっきりしています。「あなたがたが最初の日から今日に至るまで、福音にあずかっている」(5節)からです。ピリピの人々が、パウロが伝えた福音を握りしめ、信仰を持って生きていることを思い起こすと喜びが溢れてきて、神に感謝をしないではいられなかったのです。パウロは、自分が一人ではないことをよく知っています。「共に恵みにあずかる者」(7節)という風にピリピの人々を呼んでいます。『私と一緒に神の恵みに巻き込まれ、主に結びつけられ、救いの喜びを味わっている』信仰の友がいる。パウロはそのことを自分の支えにし、励ましにして喜んでいきます。

信仰者として洗礼を受けて新しく生まれた者は、成長します。「あなたがたのうちに良いわざを始められたかたが、キリスト・イエスの日までにそれを完成して下さるにちがいないと、確信している」(6節)。あなたを本当の命に入れて救ってくださったのは神だ。その神が、あなたを信仰者として生まれさせた以上は、必ず成長させ、完成にまで至らせて下さる。自分の弱さや欠けを見続けるのではなく、あなたを愛し、養い育てて下さる方を見たら良い。私は、このお方があなたがたを完成して下さるに違いないと確信している。私がそのように確信し、喜ぶのは当たり前だとパウロは言うのです。

パウロは手紙の冒頭で、三つの祈りを祈ります。『愛が増し加えられ』、『終わりの日の備えが

され』、そして『その生活が神の祝福によって義の実に満たされていく』、そういう信仰の旅が私たちには約束されています。主語は『神』です。あなたを愛し、あなたに信仰を与えて下さったお方が、あなたを福音にあずからせ、完成に至るまで成長させる。あなたに愛を満ちし、終わりの日の備えをさせ、義の実をもってその地上の旅を満ちして下さる。その神のわざの中に、この自分も、ピリピのあの兄弟姉妹も一緒に入れられている。そう思うだけで、自分の中にも喜びが湧き上がってくる。しかもそれ自体が神の喜びだ、と語るのです。何と云っても、神はひとり子を手放して十字架にかけてまで私たちを買い取り、神のものとして取り戻して下さったお方です。ひとり、またひとり神のものとして立ち帰る時、神は全世界を震わすようにして喜ばれます。

8節に「熱愛」という言葉があります。『はらわた』とも訳される言葉です。聖書の中にこの言葉が出てくる時には多くの場合、深い同情や愛情を表します。パウロは主イエス・キリストのはらわたの話をするので、主イエスは私たちひとりひとりのために、そのはらわたがえぐられるような思いをもってご自身の身を十字架にさらして、私たちを憐れみ、愛して下さいました。その深い愛情が私にも注がれているので、私もあなたたちを主イエスと同じような思いで愛することができる。いつも心にかけ、祈っている。パウロはそう言います。神ご自身が、そして救い主イエス・キリストご自身が、今もそのはらわたをえぐられるような思いを抱きながら、私たちひとりひとりをその目に留め、心にかけ祈り、支えておられるのです。

『喜びの手紙』をご一緒に読み進めながら、私たちは気づくこととなります。神が、今この瞬間も、神の言葉を聞く私たちのゆえに喜んでおられることを。神の祝福と恵みが私たちの地上の旅を喜びの旅に変えて下さることを。そして神によって造り変えられた私たちの喜びは、隣人を、兄弟姉妹を『喜び人』に変えるのです。

キリストの日に備えて、私たちは今日からまた新しい旅を始めます。神の喜びを味わいながら歩む旅です。神は、私たちから一瞬も目を離さず守り、祝福して下さいます。

(記 説教要約奉仕者)